

# 農 林 水 産 大 臣 賞 受 賞

変化に対応し、地域資源を徹底的に活かす!!

## 受賞者 帆山地区

(香川県仲多度郡まんのう町)

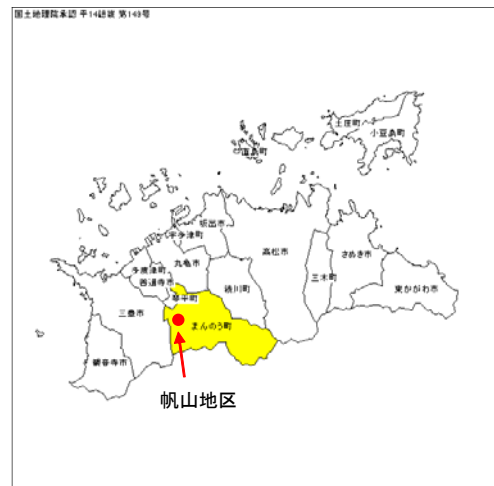
### ■ 地域の沿革と概要

まんのう町は、香川県の南西部に位置し、  
仲多度郡の3町（満濃町、仲南町、琴南町）  
が平成18年3月20日に合併して誕生した町で  
ある。総人口は19,087人で総面積19,430haの  
68%が山林であり、耕地は11%と少ない。

町内には、町名の由来となった日本一のか  
んがい用ため池「満濃池」をはじめ、山間部  
を中心に約900ものため池が点在している。  
また、町の南側には讃岐山脈が連なり、県内  
唯一の一級河川土器川が流れている。

平地から山間地までの農地では、晴天の多  
い穏やかな瀬戸内の気候を活かして米麦やブ  
ロッコリー、アスパラガス等が生産され、果樹や花きの栽培も盛んである。

第1図 位置図



注：白地図KenMapの地図画像を編集

### ■ むらづくりの概要

#### 1. 地区の特色

帆山地区は、まんのう町西部の中山間地  
に位置する農村地帯である。近くを流れる  
財田川を水源とし、基幹池である木榎（も  
っこく）池を介して地区の7つの池に自動  
配水され、パイプラインにより水を有効活  
用している。

北と南の山地に挟まれた約22haの水田で  
は、ほ場整備を契機に、ブロックローテ  
ーションに取り組み、水稻、はだか麦、ヒマ  
ワリを栽培している。同地区の水稻は、温  
暖化による品質低下が著しい香川県内にお  
いても、中山間地の冷涼な気候を活かして  
良質である。

地区の農家数は39戸であるが、近年は非農家が増加して一部で混住化が顕著となっている。

第1表 地区の概要

事 項	内 容
地区の規模	集落(1集落)
地区の性格	地縁的な集団等
農 家 率 (内訳)	33.1%
	総世帯数 118戸
	総農家数 39戸
専兼別農家数 (内訳)	専業農家 8戸
	1種兼業農家 3戸
	2種兼業農家 20戸
農用地の状況 (内訳)	総土地面積 141ha
	耕地面積 23ha
	田 22ha
	畑 1ha
	耕地率 16.3%
	農家一戸当たり耕地面積 0.6ha

## 2. むらづくりの基本的特徴

### (1) むらづくりの動機、背景

#### ア ほ場整備による効率化

帆山地区では、昭和54年から59年にかけてほ場整備事業が実施され、ほ場へのパイプラインも整備されたが、その農地をどのように活用して農家の所得向上に結び付けるかが課題となった。

地区住民の話合いの結果、転作に取り組む中で有利な作物の導入や集団化を図るため、帆山地域農業集団を設立し、地区を4区画に分けたブロックローテーションに県内でも最初に取り組んだ。平成4年からは、ブロックローテーションの中心作物として、日本有数の日照時間を活かしたヒマワリ栽培を始め、町の支援もあって平成12年以降は5ha超の作付けが行われている。

#### イ 高齢化等による衰退

ブロックローテーションを開始した当初は、水稻、麦、大豆の栽培が順調に行われ、新たな取組に対する各方面の注目も浴び、順風満帆に営農が行われていたが、地区内の農業従事者の高齢化に伴い、徐々に麦や大豆の栽培は減少していった。

その結果、作付意欲が減退し、地区外からの入作が増え、ブロックローテーションの継続など農業生産に支障が出るようになっていた。

#### ウ 変化への対応

次々と新しい農業施策が実施されて農業情勢が変化する中、地区内の状況も変わり、「このままでは、高齢化による担い手不足で耕作放棄地や入作が増えてしまう。法人を設立し、次世代の担い手を育てて帆山の農業を守ろう！」という機運が高まってきた。

そこで、平成21年9月頃から地域の祭りや自治会行事の際に、集落内での話合いやアンケート調査、先進地視察研修などを行った結果、まんのう町では2番目となる農事組合法人ほのやま（以下「(農)ほのやま」という。）が平成22年5月21日に設立された。（組合員22名）

また、ほ場整備から30年近くが経って施設等の老朽化等のために維持・更新に多額の費用が必要となったことから、農地・水・環境保全向上対策を活用し、地区全体で施設の保守管理を徹底することにより長期にわたる施設の有効利用を目指した。

さらに、「自分達の集落内の事は自分達で解決する」をスローガンとして「農家、非農家の別なく、自己中心から地区中心主義で問題を解決し、地区の活性化を図る」ことが自治会総会で決議され、全員で取り組むこととなった。



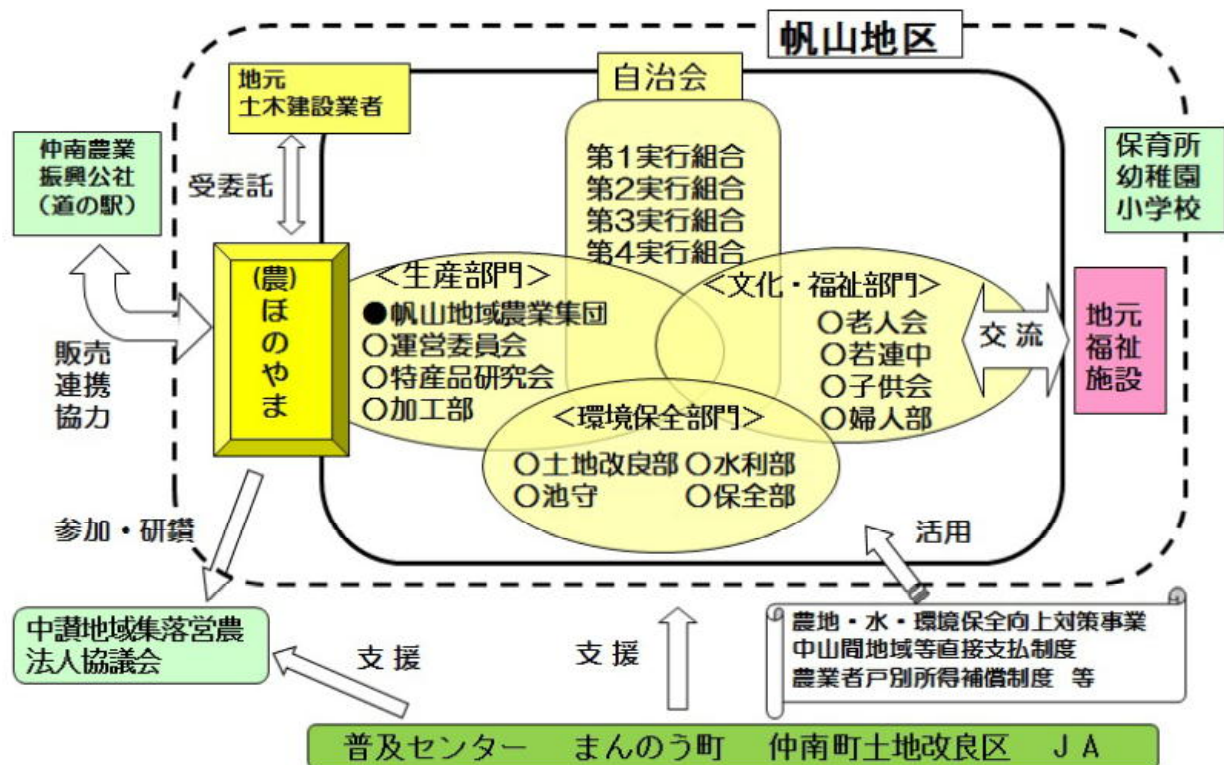
写真1 (農)ほのやまの役員の皆さん

## (2) むらづくりの推進体制

(農)ほのやまは、むらづくり推進の核として自治会の各部門に積極的に関わるほか、近隣の農事組合法人との連携も図っている。中讃農業改良普及センター管内の集落営農法人で組織する中讃地域集落営農法人協議会にも参加し、経営等の運営面や、栽培等の生産面について研鑽し、その成果を地区にフィードバックしている。

また、農業普及センター、町、JAなどの関係機関とも連携し、様々な支援を受けている。

第2図 むらづくりの推進体制



### ア 生産部門

(農)ほのやまは、農地の利用権設定や作業受託に積極的に取り組み、農地集積と機械の有効利用を図り、地区内の土木建設業者に農作業を委託し、担い手としてのオペレーターを確保している。

また、特産品研究会や加工部を中心に農作物や加工品の試作を行っており、新たな品目の導入や加工品の開発に努めている。

### イ 自治部門

ブロックローテーションにより区分けされた4つの実行組合は、地区内と地区間における水稻の生産調整や、共同作業の参加に関する調整などを行っている。

また、地区内の農地利用について、実行組合及び(農)ほのやまが調整役として積極的に働きかけを行っている。

## ウ 文化・福祉部門

老人会、子供会、婦人部、若連中などが各種イベントでのバザー、清掃奉仕活動、地区内にある特別養護老人ホームとの交流活動などを行っている。

また、仲南地区のバレーボール大会に中学生から高齢者まで幅広い世代が約60名参加し、大会に向けた練習や試合後の反省会などで交流を深めている。

## エ 環境保全部門

農地や農業用水の保全活動として、共同の作業計画を策定して、遊休農地の発生状況の把握、各種施設の点検、ため池の草刈り、水路の泥上げ、農道の補修・管理などを行っている。

これらは、仲南町土地改良区や関係機関の助言・指導を受け、農地・水保全管理支払や中山間地域等直接支払を活用して地区全体で取り組んでいる。

## ■ むらづくりの特色と優秀性

### 1. むらづくりの性格

基盤整備を機に、地域の農業の無理や無駄を省くため、県下でも早い時期に地域農業集団を設立し、最初にブロックローテーションに取り組んだ。高齢化や担い手不足等の情勢の変化に見舞われて苦勞する時期もあったが、地区で話し合っただけで将来の方向を明らかにし、集落営農を担う農事組合法人を設立した。



写真2 帆山地区のヒマワリ畑

法人は農業だけでなく、地域づくりの様々な分野で積極的な役割を担っている。

その間、新しい作物を導入したり、農地・水保全管理支払や中山間地域等直接支払などを積極的に活用して非農家を巻き込んだ活動をしたりしている。地区内の福祉施設や自治会とは災害時の相互応援協定も結んでいる。

また、一斉に咲くヒマワリは町のシンボルとなっており、帆山地区は県下でも有数の名所となっている。

現在は、ヒマワリを活かしたイベントの開催、油やドレッシングなどの加工品の開発・販売など、ヒマワリを中心とした地域づくりを行っている。帆山地区は、昔から新しいことにチャレンジしながら、自治会や農事組合法人を中心に、情勢の変化に対応しながら地域資源を活かしたむらづくりを続けている。

## 2. 農業生産面における特徴

### (1) ほ場整備の恩恵

帆山地区は、中山間地で狭小農地が多く、農作業の効率が著しく悪かったが、ほ場整備によりほ場の大区画化と整形化が図られ、作業効率が大幅に改善された。

また、ブロックローテーションにより、転作作物の計画的な作付けや農作業の効率が更に向上するとともに、話し合いにより農業を行う気運が醸成されている。

### (2) 集落営農法人の新たな担い手

(農)ほのやまの設立に当たり、新たに取り組んだことは農業の担い手育成・確保であった。帆山地区の農業従事者は、昭和58年の地域農業集団設立当初からほとんど変わっておらず、現在の農業従事者がリタイアすると地域農業を担う人がいなくなることから、その確保が急がれた。そこで、地区内の土木建設業者に、トラクター、田植機、コンバイン等の大型機械を使った基幹作業や乾燥・糶摺りを委託してオペレーターを確保した。このことにより、法人の組合員は、畦畔の草刈りと水管理作業を担当しながら、新規作物の試験栽培や農産物加工にも力を入れることができるようになった。



写真3 地元土木建設業者に農作業を委託

土木建設業者は、本業のノウハウを活かしながら、作業効率化に向けた畦畔や農道の改良などに積極的に取り組んでいる。しかし、若い従業員は農作業の経験が浅いため、作物の生理や農薬の使用方法など栽培管理の基礎知識については、(農)ほのやまが指導している。

土木建設業者としては、本業の仕事が少ない時期が農繁期と重なるため、その時期に受託料の収入が期待できる一方、(農)ほのやまとしてもオペレーターの確保だけでなく、機械の使用者が特定の人間に限られるので機械の長寿命化が図られている。また、土木建設業者の空いている倉庫を借りて(農)ほのやま所有の農機具を格納することが可能になるなど、互いにメリットを受けている。

### (3) ヒマワリを中心とした特産物栽培等の拡大

帆山地区では、麦や大豆に加えて、景観の向上や搾油による収益確保が期待できる転作作物として、平成4年からヒマワリの栽培を開始した。当初の作付面積は50a程度であったが、ヒマワリの植栽によってまんのう町を元気な町としてPRするために助成金等の支援を始めた町役場や、それ

にゆえようとする地区関係者の努力により、平成12年以降は5 haを超える作付面積となり、ブロックローテーションの中核的作物となっている。中山間地域の小さな集落において、5 haを超えるヒマワリが夏の太陽に向かって一斉に咲く様子は話題性に富み、まんのう町は「ヒマワリの里」として定着し、地区のイメージアップにつながっている。

また、安定的なオペレーターを得たことで(農)ほのやまの組合員に余裕ができ、水稻(コシヒカリ、ヒノヒカリ)とヒマワリに加えて、香川県の特産でもあるはだか麦の栽培も開始し、地区で途絶えていた麦の栽培を復活させている。平成23年からは、ヒノヒカリに替え、新品種の低アミロース米である「姫ごのみ」の栽培を開始した。(農)ほのやまでは、地元出身の江戸時代の義民である小山金右衛門にちなんで“金右衛門の里の姫ごのみ”としてブランド化することとしている。

さらに、新たな特産品として、特産品研究会を中心にマコモの栽培にも取り組み、試験栽培を経て平成24年から約40 aで本格的に栽培を開始し、平成25年は栽培面積を60 aに伸ばしている。マコモは4月下旬に株を植え付けて、9月中旬頃に肥大した茎を食用のマコモタケとして収穫するものであり、マコモタケは天ぷらや炒め物などの食材として重宝されている。マコモは水田で比較的容易に栽培できることに加え、食物繊維やカリウムが豊富で機能性に富み、高付加価値化も期待できる。そして、現在のところイノシシによる食害はなく、イノシシ被害に悩まされる同地区における耕作放棄地対策の切り札としても期待されている。

#### (4) 特産品の開発

生産部門は、特産品づくりに向けた新たな品目の研究や導入、商品開発に積極的に取り組んでいる。

各種団体が開催する商品開発の相談会、6次産業化の研修会、ビジネスマッチングの場などに特産品研究会や加工部の女性を中心となって積極的に参加し、着々と成果を挙げている。

また、販路については、(農)ほのやまが中心となって町内における道の駅「空と夢もみの木パーク(仲南振興公社)」や宿泊施設、高松市における産直所、ネット販売など、県内を中心に様々な運営会社と連携・協力をしながら展開している。

## ア ヒマワリの商品化

ヒマワリは、夏の風物詩としての景観を生み出すだけでなく、種子から油を搾って活用している。地区では、平成10年に地元の農村環境改善センターに搾油機が導入され、油の生産に本格的に取り組んだ。当初は、「ひまわり油」としてのみ販売していたが、県内の業者と提携して「太陽のめぐみドレッシング」（和風味、洋風味）を開発し、道の駅で（農）ほのやまが販売することとなった。



写真4 ヒマワリの加工品

その他、道の駅のアイスクリームや町内における菓子店のケーキの原料として、種や油を供給している。また、最近では機能性成分に注目して有望品種を導入し、県の試験研究機関等と連携しながら、付加価値の高い加工品の開発を目指している。

## イ マコモタケの商品化

マコモタケは、主に生食用として最寄の道の駅に出荷しているが、生食用では出荷できる期間が限られることから、加工部の女性が中心となり加工品の開発を平成21年頃から開始した。キムチや漬物などを試作し、消費者の意見を参考にするなど試行錯誤の結果、「マコモタケの辛子漬」を商品化して平成24年から販売を開始しており、好評を得ている。マコモタケの認知度は徐々に高まってきており、販路拡大が期待できることから「マコモタケの切り干し」など新たな商品の開発を進めている。

## (5) 中山間地域の宿命・・・イノシシ対策

当地区は中山間地域にあり、イノシシによる農作物被害が多く発生していたが、平成24年に国の鳥獣被害防止総合対策事業によるメッシュ柵を2kmにわたって設置した。

受益者が限られて集落での話合いが進まない地域もある中、ブロックローテーションで培われた話合いの精神で「自分達の集落内の事は自分達で解決する」を合言葉に調整がスムーズに進み、地区全体が協力して設置作業を行った。

## 3. 生活環境整備面における特徴

### (1) 25万本のヒマワリのカ

平成12年度から毎年、25万本を超えるヒマワリの花が一斉に咲く7月には、自治会の行事として「ひまわりまつり」を地区公民館を中心に開催している。「ひまわりまつり」では、ヒマワリの景観を地元の福祉施設、保育所、幼稚園、小学校等地域の方々に楽しんでもらうため、ヒマワリを題材にしたフォトコンテストや写生大会、毎年恒例となっている野外オーケ

ストラの生演奏が行われている。会場の地区公民館では、ヒマワリの切り花、ドレッシングなどの特産品販売と地元産茶葉を使ったお茶のお接待などが行われる。

運営に当たっては、100名以上の地区住民がボランティアとして携わり、参加者と交流を図っている。また、「ひまわりまつり」はテレビや新聞など県内の各種メディアにも大々的に取り上げられ、町内に加えて県内外から多くの人を訪れている。

## (2) 池干しをはじめとする地域の環境保全活動

池干しは、古くから行われているため池の管理方法の一つであるが、近年は全国有数のため池を有する香川県内でも地域の慣行として行われているところは少なくなっている。

帆山地区は、毎年池干しを行うことで、水質保全を図るとともに、ため池内の点検・機能診断によって施設の補修を効果的に行っている。池干しを非農家も含めて実施することによって、地区住民に対し、池の中に捨てられた空き缶やゴミの清掃、堤の草刈りなどを通じて池の中を見てもらい、地域の大切な資源であることを再認識させ、地域の環境に興味を持ってもらうよう努めている。

また、池干しの後、毎年一か所の池における周囲の雑木の伐採を行うことにより、倒木や枯れ枝、落ち葉が少なくなり、池の景観も良くなっている。こういった取組の結果、地区住民の相互信頼関係が芽生え、地区中心の意識が高まった。

その他、地区内一斉清掃や畦の草刈り、地区内各種施設の点検なども含めて、農地・水保全管理支払や中山間地域等直接支払を活用しながら、地区住民全体で取り組んでいる。



写真5 池干しと雑木整理

## (3) 地区内の福祉施設等との交流の広がり

毎年8月には「夏のゆうべ」と題し、特別養護老人ホーム「仲南荘」の入居者とその家族に対し、自治会のうち老人部、婦人部、若者らが手打ちうどんの振る舞いや各種バザーの開催などで接待し、地域ぐるみで盆踊り・花火などを行って地域や世代を越えた交流を図っている。参加者は地域住民スタッフ、施設職員に一般客を加えて300名を超し、小さな集落の一大イベントとなっている。



写真6 地元福祉施設入居者との交流



また、ヒマワリの開花と同時に、仲南荘の入居者とその家族を満開のヒマワリ畑に毎年招待して、自治会福祉部門の役員40人が案内や介添えをしながら車椅子で散策している。

さらに、地区の各部門で行っていた用水の泥上げや、ポイ捨てされた空き缶とゴミ拾い、カーブミラーの清掃等に仲南荘からも積極的な参加を得られるようになり一層交流が進んだ。平成10年の開所以来、これらの交流が共助の和を広げ、高台にある仲南荘が災害等の避難場所として協力することとなり、平成18年に自治会と仲南荘が災害時に相互に協力し合うことを取り決めた協定を締結するまでになっている。